

青森ねぶたの題材分類と変遷に関する一考察

工藤 友哉

本研究は、青森市で開催される青森ねぶた祭にて制作される「青森ねぶた」の題材の分類と変遷について考察を行うものである。ねぶたとは、針金と角材による立体的な骨組みに和紙を貼り、墨とロウで書割りと模様描きを施し、染料や水性顔料で彩色したものを、内部から照明を当てて光を灯す立体造形物である。台車上の造形物はねぶた師と呼ばれる職人の手により毎年作りかえられており、日本や中国の史実、伝説を表現した勇壮華麗な武者人形を表現することが多い。

筆者は2016年に青森市内の個人や機関に協力を仰ぎ、戦後の歴代の青森ねぶた約1300台の写真資料を「青森ねぶた全集」としてまとめた。東北芸術文化学会誌・芸術文化第二十二号（2017年、東北芸術文化学会編集委員会）及び第二十三号（2018年、同）掲載の筆者拙稿では、それぞれ青森ねぶたの時代毎の造形的変遷、構成の細分化と分類について言及している。本稿はこれら青森ねぶたの造形に表現される主題（題材）に焦点を当てた続稿に当たる。各図のねぶたの詳細や統計値の詳細は、巻末〔図版リスト〕、〔添付資料〕に掲載している。本稿で示す各項目のねぶた台数は2019年分までの約1500台中の統計結果としているが、時代を遡るに連れて不確定なものが多いため、ある程度題材が判明している1950年代以降に特に焦点を当てている。

本稿では従来の題材分類例を参考に、各ねぶたの題材を「地域分類（日本・中国・郷土・異国・その他）」と「主題分類（史実・伝説・物語・芝居・宗教・民俗）」の二観点で整理し、導かれた詳細を「題材分類」としてまとめた。さらに各分類における歴代の出陣台数を統計調査を試み、より具体的な題材例の提示や各時代の題材の傾向を振り返っている。これら調査の結果、青森ねぶたの題材はある程度幅があるものの、やはり一貫して日中の歴史的な名場面や著名人を表現する傾向が強いことが裏付けられた。条例等における文面上の制約があるわけではないものの、歴史的変遷の中で淘汰された領域が現在に伝わっているため、その領域から外れたものは批判の対象となるようだ。過去に一同登場したエジプトの「ファラオ王」のねぶた（2009年）が良い例で、賛否両論となり物議を醸した。同じような題材で、2015年に中型の「スター・ウォーズ」ねぶたも登場し、こちらも「伝統的であるか否か」の話題の対象となった。

青森ねぶたの題材観は、長い時間をかけて上記のような取捨選択を繰り返し「伝統的」な題材像が構築されたようである。現在の青森ねぶたでは「日中の歴史的な名場面や著名人」という内容がそれであり、これに反する題材は批判の対象になりかねない。しかし、幸いにも青森ねぶたでは題材を厳格に制限する制約はなく、ここ十年では郷土風習に目を向けた新興題材が増加している。長い目で見ると、現時点で異質と思われる題材も許容範囲に収まる可能性が十分あり、今後も変貌していくものと思われる。今後は弘前市や黒石市など、他の津軽地域の祭りで登場したねぶた・ねぶたの題材観の比較も視野に入れ、定期的に調査を進めたい。